

「校歌を読む」

島原信義（元本校教諭）

昭和六十一年度の生徒会誌「すゞかけ」は校歌を特集記事にしている。それによると、生徒は釈迢空作詞、安倍盛の宮城県佐沼高等学校校歌に対して、「長い」「難しい」「素晴らしい」「素晴らしい」という感想を持っている。この感想は現在の生徒も同様であろう。この三つは校歌のキーワードである。

「長い」――一連九行の詞は確かに長い。同じ迢空作詞の塩釜高校の校歌は八行、迢空の校歌には十行のものも珍しくなく、中には十一行のものもある。因に小倉博作詞、楠美恩三郎作曲の旧校歌は八行である。私が塩釜高校の前後に勤めた築館高校、登米高校はともに白鳥省吾の作詞であるが、それぞれ四行、五行と短い。迢空の詞は概して長い。加えて曲も始めと終わりが悠長で、歌えばなお長くなる。

「難しい」――迢空は即ち古代学者折口信夫であり、古語を自由に駆使し、古代人の心に自由に出入りした人である。迢空の作品には古語が日常語のように頻出する。この難しさは文語学力の低下とともに今後ますます強く感じられるであろう。佐沼高校の校歌は迢空作詞の校歌としては易しい方である。

「素晴らしい」――歌詞は曲がつけばどんな歌詞でも一応通る。しかし、詩として読むに堪える歌詞はそうざらにあるものではない。制約のある校歌では特にそうである。甲子園で勝利校の校歌が演奏され、その歌詞が字幕に出るが読むに堪える歌詞はあまりない。その点佐沼高校の校歌は詩としての品格を有し、読むに堪える立派な歌詞である。作曲家安倍盛は鍛冶校長宛の書簡で「全国高等学校校歌のうちの白眉」「曲づけをせず、単に朗読しただけでも立派」であると言ひ、それが作曲の難しいことも語っている。

「ひんがしによき国ありて」校歌はまず国讃めで始まる。西(大阪)の人迢空にとつて東は憧憬の地であつたろう。「国」はもちろん郷土である。ところで、この一行は五七調か七五調か。「よき」は前にも後にもつけることができる。どちらにもとれるのである。この点を迢

空は鍛冶校長宛の書簡で「音脚と意義とは別々」と言ひ、二番の一行目を例に「意味は『野に出で、聴け。水の音』だが、音脚は『野に出で、きけ水の音』」であると注意している。つまり五七調である。全体の音脚は「57・55・55・75・75・75・75・55・544」であるとも言っている。いろいろな音脚(音数律)を使って複雑である。読むにはともかく曲づけには面倒である。安倍盛はここを七五調にして作曲している。この部分は荘重で厳粛である。

「北上の遠山を朝空に垣とせり」ここは美しい詞句で曲も一転軽快晴朗である。この響きは「いさぎよし我が佐沼」まで受け継がれる。国讃めを具体的にして風土を称えている。迢空は昭和二十三年五月二十二日に講演のため来町しているが、校歌依頼後取材のため来校はせず、教え子の菊池一先生の短歌数首と地図をもとに作詞したという。菊池先生の歌をもとにした部分は、こと二番の「せせらぎはとほく来て遠く去る 迫川その瀬のそよぎ」三番の「栗駒の空タやけて」であると菊池先生自らが語っている。先生の遺歌集を編んだ時、その歌を探したが見当らなかつた。校歌成立以前の作品をあまり収集できなかったからである。山を垣と見るのは古事記以来の伝統である。

「心すぐなるよき人の 常に和みて住むところ」国讃めのあとは人讃めである。「心すぐなる」とは心が素直で正直であるということ。これは単なる言葉の綾ではない。佐沼高校通学圏の人々は大方心すぐなる人と言っている。また、迢空は菊池先生を通して佐沼の人々を見ていたのかもしれない。

「われら清しく行き交ひて 若き礼讓里に充つ」ここは校内外の往来風景を思い浮かべればよい。

「礼讓」は逍空が重んじた徳目であり、他の校歌にも出てくる。しかし、佐高生は讓はともかく礼を十分尽くしているかどうか。照れくさいのか挨拶をきちんとしない傾向があるのはよくない。今はどうであろうか。

「いさぎよし我が佐沼」以下は学校讃めのリフレインで、「いさぎよし」が「みづみづし」「かがやかし」と変化する外は同じである。曲は「ああ」以下が再び荘重厳粛になっている。「高校」と略すより「高等学校」と言う方が重厚で品であるが、作曲はしにくいであろう。歌っていてこの一行が特に長く感じられるのではあるまいか。

二番に移る。「野に出でて聴け水の音」は哲学的で魅力ある詞句である。「聴く」とは心を集中して大きくことである。現代は何かと騒々しく静かに聴く心の働きが失われがちである。是非聴くことに心を配りたいものである。

「昼深きせせらぎは」とほく来て遠く去る 迫川その瀬のそよぎ」流れ行く水は人の心を深くする。旧校歌では「したたる末の迫川 ながれて往にし春秋を」と歌っている。古い人達は草土手の牧歌的風景を懐かしく思い起こすであろうし、新しい人達はコンクリート護岸の化粧に都市的イメージを育むことであろう。迫川にまつわる個々の思いは時空を隔てれば隔てるほど掛替えのない貴重なものになる。

「日々に学問新しく 技術とりどり潔らかに」「学問」は逍空の校歌にはよく出てくる。当然のことだが学校は学問をするところである現代の学校ではそれがどうかするとなおざりにされかねない有様であるのは憂うべきことである。「技術」は他の校歌では「技艺」「技能」の形で出てくる。「青春とこしなへならむ」の「とこしなへ」は永遠に変わらないこと、音脚の上では「とこし」と「なへ」に分かれるので歌っている時は意味がとりにくいであろう。永遠の青春とは心の青春である。卒業後佐沼高校時代を思い起こす時、青春は蘇り、永遠に変わらないのである。「みづみづし」は「青春とこしなへならむ」に照応する。

三番に行こう。「栗駒の空タやけて」朝の東の北上に対して、夕べの西の栗駒である。これも心に深く残るイメージである。

「しづかなる夜の思ひ」は「しづけさ」「かそけさ」「ひそけさ」「さびしさ」を好んだいかにも逍空らしい思弁的、内省的な詞句である。全体の構成を見ると、一番は朝、二番は昼、三番は夜になっっていることに気づくであろう。この構成は逍空が校歌を作る際に用いた手法で他の校歌にも多く見られる。

「陸奥の荒野らを 悉皆田に墾りし祖々の 代々の経験とほけれど」代々の祖先が荒野を開墾して田を作ってきた苦労に思いを馳せている「みな」としないで「悉皆」に「ミナ」とルビをふるのも逍空流である。さてその「代々の経験」は現在からは遠いのであるが、次が文脈の上で少々難しい。

「匂ひやかなる近代の 智識の外のものならず」約めて言えば「経験は智識の外のものではない」というのである。と言ってもそれですつとわかるわけではない。言葉を捕って解釈すると、祖々代々の開墾経験は現代の私達にとって直接経験できないことであるけれども、その労苦は知識でもって間接的に理解できることであり、また学問知識に励む労苦は開墾に励む労苦に相当する尊いものであるというのであろう。作者の意図はどうであったのか。歌詞の引用は「佐沼高校七十五年史」によったが、「智識」は全集では「知識」となっている。逍空自身がどちらを使ったのか、歌詞原稿が失われているのでわからない。全集でみると「知識」も逍空の校歌によく使われている。近頃は「知識」軽んずる傾向があるが、真の知識は倫理性の強いものである。漠然と心の教育などというより真の知識教育に励むほうがよい。「学問」「技術」「知識」と逍空は教育の大事なところを校歌に折りこんでいる。

校歌は初め作詞を高村光太郎に依頼したが断られた。光太郎には方々の学校から依頼があったが、

片端から断っている。若柳高校も断られている。迢空に決まったのは先年講演をしていたことと、教え子の菊池先生がいたからである。迢空との交渉には菊池先生が当った。迢空は菊池先生への返信(口述らしい。昭和二十六年、月日不明)で、「校歌の事、出来あがりだが、遅れても催促せぬと言ふ条件ならお引き受けしましょう。これはあまり引き受けすぎて、せめられこりこりしてゐるからです。それから私の歌だけに三萬円出してもらふと言ふのは欲張る様ですが、さうでもしなければ百篇位作らなければ寄附の思が達せられません。」と言っている。迢空は母校国学院大学に寄付のため、校歌を積極的に引き受けていたのである。

歌詞の到着が八月三十日、楽譜の到着が九月三十日。新校歌は昭和二十六年十一月五日から行われた創立五十周年記念行事の一つとして九日新校旗とともに披露されている。当時の最高学年は第四回卒業生であるから、第三回までの卒業生はこの新しい校歌を知らない。その人達にとって懐かしいのは、小倉博作詞、楠美恩三郎作曲の旧制佐沼中学校の校歌であろう。四・五・六回卒は、新旧両校歌を歌った世代であり、新校歌と純粋に一体感のあるのは、七回卒以降の人達であろう。昭和二十年旧制佐沼中学校に入学した私は、登米高校に移るまで三年間旧校歌を歌い、新校歌には教員として二十一年間親しんだ。しかし、日常の折節ふと口をついて出てくるのは旧校歌の方が多い。校歌は青春とともにあり、本質的に生徒の歌だからであろう。莊重にして晴朗、格調の高い宮城県佐沼高等学校校歌は、在校生に誇りを持って歌い継がれ、卒業生の心に永く青春の響きを奏で続けるに違いない。